

ご遺族の手記

無題 (夫が亡くなったことについて)

君津市 女性

交通事故で主人が逝って1年が過ぎ、気持ちもなんとか落ち着きを取り戻し、子供達と毎日平穏な日々を送っています。

今でも振り返ると悔しさに腹が立ち、悲しさに涙が出てきます。

あの1本の電話が私に悲しい知らせを伝えたのです。決してあってはならない出来事が起こったのです。一瞬耳を疑い信じられない気持ちでした。

主人が救急車で運ばれ付き添う私

病院で1人待つ時の心細さと祈る気持ちの中、駆けつけた子供達の顔を見た瞬間、自分を取り戻し気丈に振る舞う私

病院に運ばれ治療を受ける主人

苦しむ主人

脳外科の医師に呼ばれ、

1, 自然死

2, 植物状態

の2つの選択肢のうち、

どちらかを選ばなければならなかった時の家族の辛さ

初めて知った交通事故の恐さ

大切な人を失う辛さ

自動車も自転車もほんの少しの不注意が大きな事故へとつながる恐さ

事故を起こした加害者、事故にあった被害者のどちらも事故によってなにかもがかわってしまう恐さを知りました。



娘の交通死

白井市 井手 渉

当時18歳の高校生の娘が、交通事故に遭って亡くなって20年になります。何の前触れもなく何も言えず突然逝ってしまいました。「なぜ自分の子供が」という諦められない感情は今も残っています。それからの私たち家族の人生は一変しました。娘を失っただけでなく、いつもの当たり前の生活が崩壊の危機にさらされたのです。縁がないと思っていた裁判では、警察、検察、地裁、高裁、最高裁と続きました。裁判が終わったのは、娘の死後10年の時間が過ぎていました。

さて、娘の突然の死は精神的に堪え難く、救済してくれる所を県警や警察庁に問い合わせましたが、当時の日本には被害者支援組織はありませんでした。娘が亡くなって4ヶ月後に、孤軍奮闘して「全国交通事故遺族の会」を設立し、被害者の救済と交通事故防止のために活動してきました。詳細については、インターネットで「全国交通事故遺族の会」を検索していただければと思います。最近では、交通死者は減少していますが、それでもまだ毎年4千人以上の方々が亡くなっています。地球規模で見ると毎年120万人もの死者数が報告されています。国連で「世界道路交通被害者の日」が採択されています。私達の会では、去る11月21日、3回目の「世界道路交通被害者の日」を主催しました。今年は、警察庁をはじめ交通事故に関係する諸官庁が「後援」をしていただき画期的なことでした。今後は国家的行事として開催されることを切望しています。

私の娘は、自転車で通学中ダンプカーに衝突されて亡くなりました。当時自転車は被害者になるケースが多かったのですが、最近では自転車同士や自転車が歩行者と衝突し、加害者になる傾向があり、損害賠償も絡んで大きな社会問題になっています。

自動車は鉄道と違ってレールをもたないきわめて不安定な乗り物です。しかもお

びただしい量の自動車が相互に出会いながら、しかも縦横無尽に走るのに、自動車相互の調整がうまくいかず事故が起こる危険性は高いのです。自転車についても同じことが言えます。理想的な交通事故防止は、運転手の適性をもっと厳格にし、自動車の構造や道路環境を人間の注意力に頼らないでもよいように改善することだと思います。飲酒運転厳禁は勿論ですが、法定速度を守ったり、一時停止を守ったり、駐車禁止の所には駐車しないこと。とにかく交通違反をしないこと。更に運転計画を立てて、体調を整えることも大切です。注意力散漫や判断力が衰えている時は、運転を中止する勇気も大切だと思います。自転車は車道では被害者になり、歩道では加害者になる傾向があります。自転車専用道路の検討も必要です。自転車も交通ルールが作成させると伺っています。義務化されて交通事故が減ることを希望しています。交通事故は絶対に他人事ではないのです。



無題（息子が亡くなったことについて）

千葉市 29歳 男性

平成21年9月25日に事故は起きました。夕方に妻から電話があり、「息子が事故にあった。」と聞かされました。私は妻をなだめて、社長に事情を話し、すぐに病院に行きました。

病院に着くと、真っ赤に目を腫らした妻がベンチに座っていました。妻に「大丈夫だよ」と声をかけて、しばらくすると先生に呼ばれ診察室へ。先生の話によると、息子はすぐに手術をすれば大丈夫だろう。と言っていたので、私もきっと大丈夫だろうと思っていました。

そして、やっと息子の顔を見れたのですが、その瞬間に私の中にあった余裕の気持ちは一気に絶望に変わりました。

顔は大きく腫れ上がり、今朝見た息子とは変わり果てた姿でした。

私は手術室に行くまで何度も息子の名前を呼んだのですが、反応はなく苦しうに呼吸をしていました。

息子は手術室に運ばれ、待合室で待っている間、私は神様にずっとお願いしていました。神や仏を信じる人間ではなかったのですが、あまりに変わり果てた息子の姿にもしかしたら、という思いが私に大きくのしかかり、必死に息子の手術が成功して、元気な姿が見れますようにと祈り続けました。

どれ位の時間が経ったのでしょうか・・・先生が申し訳なさそうな顔で手術室から出てきたので、私は悟りました。

「ああ・・・きっと息子は・・・」

そして先生から告げられた一言は・・・

「一生懸命に処置をしたのですが、出血が止まらず、今付けている人工呼吸器を外せば・・・」

私は溢れる涙を抑え、妻に

「Rは頑張ったよね？これ以上辛い思いをさせるのはよそう。」

妻も溢れる涙を抑え静かに頷きました。

私は、先生に「外してあげてください。」

とだけ告げ、妻を抱き寄せ、思い切り泣きました。

君とお別れしてから、早いもので一年たつね。1日たりとも忘れたことはないよ。

今でもひょっこり帰ってきそうな気がする。家の中を見渡すと君との思い出がいっぱいある。7月2日に君の弟が生まれたんだよ。

やっぱり兄弟だね。君の赤ちゃんの時に似ている。心臓に穴が開いているみたいで病院に通っているけど、そんな風に見えない位元気いっぱい育っている。心臓の穴はそんなに心配しないでも大丈夫らしいから、君も心配しないでね。家を見渡せば君との思い出がいっぱいあるのに、君を抱きしめることも出来ない。小さな手を握りしめてあげることも出来ない。すぐそこに居るのに、もう君の声を聞けない。もっといっぱい遊んであげれば良かった。もっといっぱい抱きしめてあげれば良かった。もっと・・・もっと・・・。

あの日、君の横で一晩中泣いた。悔しくて悔しくて・・・。
何も出来ない自分に悔しくて・・・。怒ってばかりいた自分がゆるせなくて。

だけど怒っていたのは君の事嫌いだからじゃないんだよ。パパみたいな駄目な大人にならないで欲しかったから。立派な大人になって欲しかったから。こんな事になるなら、もっといい子いい子してあげたかった。パパもママもみんな元気にするから、ゆっくり休んで。こんなパパの子供に生まれてくれてありがとう。
生まれ変わったら、また家族になろうね。



もう一度妻と2人でご飯が食べたい

いすみ市 岡本昭三 82歳

私の妻は平成19年10月に交通事故で亡くなりました。相手の脇見運転が原因です。時間にすれば2秒から3秒の脇見が妻の一生を奪ったのです。

その日の朝は妻と2人でご飯を食べて、私はいつものように釣りに出かけました。妻は畑に行くと言っていましたが、この時の会話が妻と交わした最後の言葉になりました。

妻が事故に遭ったのは、午前8時半ころです。相手は近くに住んでいる会社勤めの女性でした。出勤前に用事を済ませようと急いでいたのと助手席のバックが気になって脇見をしたため、自転車で道路を横断していた妻を発見できなかったのです。はね飛ばされた妻はブロック塀に叩きつけられました。

釣り場から呼び戻され慌てて病院に行くと妻は手術中でした。手術が終わり集中治療室に運ばれる妻に声を掛けましたが反応は無く、担当の医師からは「出血がひどく、今夜がヤマです。」と言われました。その夜、息子が見舞いに行ったところ、目を開けて何か言いたげだったそうです。意識が戻ったのだと思いますが、大きな怪我だったので大変苦しかったのではないのでしょうか。

次の朝、病院から「容体が急変した。」との連絡があり急いで駆け付けると、私たちを待っていたかのように妻は息を引き取りました。

亡くなった妻と一緒に自宅に戻ると相手の運転手が来ていました。彼女は、泣いて詫びていましたが、妻を失った悲しみが強く、何も考えられませんでした。彼女は妻の命日やお盆にお墓参りに来ます。お線香もあげてくれますが、事故から3年が経った今でも、恨む気持ちは無くなりません。あの時の悲しさは忘れられません。彼女は執行猶予付きの判決を受けましたが何故、妻が死んだのに刑務所に入らないのか不思議です。一生罪を背負って苦しみながら生きて欲しいと思います。

彼女は私の家の近所に住んでいます。その親戚も私と同じ自治会に住んでいます。私はその人たちの顔を見る度に元気だったころの妻を思い出して悲しくなります。遠い所に住んでいる人であればこんな思いもしないで済むのに、どうして私が今でも苦しまなければならないのでしょうか。

妻が亡くなり、私は1人きりになってしまいました。息子や民生委員さんも時に訪ねてくれますが、1人で作り1人で食べるご飯はとても寂しいです。もう一度妻と2人でご飯が食べたいです。自転車に乗っている女性を見る度に妻を思い出します。あの時、あの人が脇見さえしなければ妻は生きていたはずです。

自転車に乗る皆さんに言いたいことは、何処にでも脇見運転をする人がいるということです。決して事故に遭わないでください。目立つ姿で車の注意を引いてください。そして、家族も悲しませないでください。私のような人をこれ以上出さないでほしいと思います。



桜と失った笑顔

市原市 70歳 男性

あれから約3年の歳月が経ちました。

以前は、野山が芽吹くのをみて春の訪れを感じ、やがて新緑の緑へと変わっていく中、自然のエネルギーを体を感じながら、家族みんなで健康で明るく元気な生活を送っていました。

我が家は代々農家で桜の花が咲き始める頃になると、田植えの準備や本格的な農作業を前に、今年も良い米を作ろうと気持ちが沸き立ち、自然に笑みがこぼれ、そして仕事の合間に花見をするのがこの時期の楽しみでした。

しかし、あの出来事を境に、私達家族は桜の花が咲く時期が来ても、以前の様な気持ちにはなれず、笑顔も失ってしまいました。

それは、3年前の4月のことでした。

当時97歳になる私の親父は、いつもの様に自転車に乗って畑仕事に行く途中、車にはねられて命を失い、父の命と一緒に、私達家族の幸せも消えてしまったのです。

97歳というと、世間では「よぼよぼのじいさん」と思いますが、私の親父は毎日農作業をしているため、体は97歳と思えないぐらい健康でガッシリとしており、またこれといった病気もなく、100歳まで生きることを目標に、日々自分で健康管理をしていました。

親父の人柄は、真面目で面倒見の良い性格で、農作業の段取りや祭事のしきたり等に詳しく、私や家族だけではなく近所の人からもとても頼りにされていました。

また、親父は農作業に行くため毎日自転車を運転していたので、道路を横断する際などは車には十分注意をし、交通事故に気をつけるよう、毎日家族みんなで注意をしあっていました。

事故の日の朝、親父はいつもの様にいつもの時間に起きてご飯を食べ、家族と笑顔で会話をし、そしていつもの様に自転車に乗って畑に出掛けていきました。

そして、いつもの時間に帰ってくるはずが突然、近所の人から親父が事故に遭った事を聞かされました。一瞬頭の中が真っ白になり、訳も分からないまま事故現場に行くと、まず、目に入った光景は、親父が救急車の中に横たわり、そのそばで救急隊の人達が懸命に治療を行っている姿でした。

私は救急車の中で横たわる親父に懸命に呼び掛けたのですが、親父は私の呼び掛けにも反応せず、全く意識のない状態でした。

病院に運ばれた親父は、百歳まで生きるという夢を断ち切られ、私の言葉も届かないまま亡くなったのです。

事故の相手方は子供2人を持つ母親で、当時は一応の謝罪はしてくれました。

しかし、その後保険会社との示談の話し合いでは、親父が「年を取っている。」と言われて示談金を下げられ、相手の方が謝罪していた内容とは異なっていました。

この時、私達家族は親父を亡くした心の悲しみを抱えているのに、追い打ちをかけられるような、とても嫌な思いをし、その気持ちは今でも消えず、深く心に残っています。私も車を運転するので、いつ事故を起こす側になるか分かりませんが、一つ言えることは、みんな交通事故を起こさないよう気をつけていると言いながら、横断歩道を渡ろうとしている人がいても止まらないのが現実です。

一人一人が本当の意味で思いやりを持った安全運転をすれば、事故のない安全な街が実現できると思います。

交通事故で親父を亡くし、あまりにも突然の悲しみに、私達家族は笑顔を失ってしまいましたが、事故のない世の中になれば、亡くなった親父も、私達家族もきっと笑顔を取り戻せるのではないかと思います。

いつかきっと、その日が来ることを信じています。

無題（妻が亡くなったことについて）

野田市 細井 久義

平成19年3月13日午後1時過ぎ、家の電話が鳴りました。それは、妻の友人からの電話であり、「落ち着いて聞いてください」との第一声に、私は「妻に何かあったのだ」と咄嗟に感じたのでした。

電話は妻が交通事故に遭い意識がないということを知らせるもので、私は急いで現場に向かうと、歩道上には妻の自転車が倒れており、付近には若い女性がいたのです。その女性は私に対して「大変申し訳ありません」と声を掛けてきたので、この人が運転手だとわかりました。

救急隊員から「ご主人さんですか。急いでください、ドクターヘリが待っています」と言われ、ドクターヘリに乗り込むと、そこには意識のない妻と一生懸命に治療をする医師の姿がありました。

病院で治療を待つ間も、「何とかならないか」と祈っていたのですが、その日の夜になって医師から「諦めてください」と、私にとっては最も残酷な説明を受けたのです。私は堪えていた悲しみが一気に込み上げてきたのです。

そして、妻はそのまま意識を回復することもなく翌朝に死んでしまったのです。

私は、40年以上連れ添った妻を突然亡くしてしまいました。強くて優しい性格の妻は、物事を「ズバツ」とはっきり言いますが、人の面倒をよく見る人で、ホームヘルパーの仕事をしていました。また、高齢で介護が必要な私の母の面倒をよく見てくれていました。

妻を亡くしてからは、母親の介護や炊事・洗濯など、妻が活着ているころには考えられないような現実の生活が待ち受けており、事故後しばらくは寝る前などに妻を思い出し涙を流しておりました。

相手の運転手を恨みたい気持ちもありましたが、相手は若くて、小さな子供のい

る母親であり、わざと事故を起こした訳ではないことはよくわかっていたので、私は許すことにしたのです。相手の運転手も相当ショックであった様子で、妻の命日やお盆などにも花を手向けてくれるなど事故のことをいつまでも忘れることができない様子でした。

この事故の原因は、相手の運転手が対向車に気をとられて、左前方を走行する妻の自転車との間隔をとらないで走っていたということでしたが、今回の事故のように加害者側も被害者側も精神的負担を強いられる結果となるような交通事故を二度と起こさないために、全てのドライバーに安全運転をお願いしたいと思います。



一瞬の明暗

柏市 81歳 男性

『ガチャン』という甲高い金属音が突然私の耳に響いた。2階の居間で外出の身支度をしているところでした。午前11時に家を出るつもりで、さあ出掛けるぞ。という矢先のことでした。誰かがガレージのアルミ製の柵に自転車でもぶつけたのかと思ひながら、ベランダ側の窓をあけて、下を覗いてみると、ガレージの前の道路に人が集まる異様な雰囲気なので、何事が起きたのかと、急いで外に飛び出しました。普段は多少の物事には動じない私にしては、意外に機敏な行動でした。

虫が知らせたのかもしれません。

私がいきなり目にしたものは、臉を閉じ、唇をキッと引き結び、硬直した表情で仰向けに倒れている妻の姿でした。傍らで身を屈め妻の胸を押して人工呼吸をさせようとしている男がいたので思わず、“やめろ！そっとしておけ”と怒鳴りました。素人の当てにならない応急処置より救急車を呼ぶのが先決だと思い、救急車を呼ばなきゃというと、近くにいた隣家の奥さんが「救急車は呼びましたよ」と言ってくれました。それから、ものの2、3分も経たないうちに救急車の姿が見えました。

意識不明の妻は直ちに慈恵医大病院の救急室に搬送されましたが、午後1時30分、待合室で待機していた看護師さんに呼ばれて処置室に入ったところで、担当医から『お気の毒ですが、残念ながら・・・』と妻の最期を宣告されてしまいました。事故発生から2時間30分後のことです。即死と言ってもよいでしょう。

当日は朝から、なぜかゴミ収集所の後始末が気にかかる様子でしたので、「当番の人がちゃんとやってくれているから、心配することないよ」と妻に言っていたのですが、自宅からわずか50メートル位の所にあるゴミ収集所を見に行くために自転車で乗り、道路を横断しようとしたところに、ほとんど直角にバイクと衝突して起きた惨事でした。

たった3時間足らずの間に、元気だった妻は生から死へ、私たち家族も180度、人生が暗転してしまったのです。事故のあと、目を見開くことも、口をきくこともできず、あっという間にあの世に旅立ってしまった妻の無念さは、いかばかりかと思うだけで胸が張り裂けそうになりました。

事故から1年半程経過しましたが、いまだに子供や孫たち、また姉妹、永年の親友たちの号泣している姿と柩の中で花に埋もれ瞑目している妻の顔がダブって鮮明に蘇って来たりして、何ともいえない気持ちになります。当時の心の傷は癒しようがありません。子供や孫たちも妻の死についてできるだけ触れないようにしている気配です。柏市の住民にとって自転車は、なくてはならない気軽に便利な必需品みたいな乗り物です。しかし、今の車社会のなかでは危険な乗り物でもあるのです。数多くの人が自転車で『ヒヤリ』としたり、『怖い』と感じたりしたことが一再ならずあると思います。

私の妻は、渋滞して動かない手前の車線から車の間をすり抜けて、空いている反対車線に飛び出したところで事故に遭いました。このような場合、自転車から降りて、左右の安全を十分に確認しながら横断すべきで、安全に対する注意不足から起きた事故だと言えるかもしれません。また、加害者のバイクも車の間から人か自転車が飛び出して来るかも知れないので、スピードを抑えるとか道路の左側に寄って進行するなどの注意をしていけば防げた事故かも知れません。

私の妻は自転車が何よりも好きで、何十年も利用してきて、これまで大過なく事故も起こさずにきたのに、本当に魔が差したとしか言いようがない事故でした。しかし、だからこそと言いますか『自転車慣れ』しないことが最も大切なことではないかと痛切に思う次第です。

無題（息子が亡くなったことについて）

匿名 女性

事故死してから3年6ヶ月経ちました。今でも一日たりとも忘れた事はありません。おとなしく頑張り屋の息子でありました。息子は中学を卒業すると高校には行かないと言っており、知人の口利きで15歳で家を出て、栃木県の方で5年間修行し、20歳の頃、自宅に戻り、その後は父親の勤務先の下請け会社の社長さんが雇ってくれました。

そこでは色々な資格も取得させてもらえ、5年ほど勤めましたが、突然身体の具合が悪くなり病院へ入院、膠原病とわかりました。

その後は繰り返しの入院で仕事にも恵まれず、お金もかかり私たちが働いておりました。

そうこうしている日々の中、野良猫が我が家に迷い込んで、そのまま飼うことになり、エサ代もかかるので働きたいと言っておりましたが、まだ無理だからしばらくは家に居るように言っていたのです。

6月18日の朝早く、玄関先に腰掛けていたので、寝たら？と声をかけたのですが、その内、朝の3時頃自転車を出掛けていきました。病気のため日中はなかなか表に出掛けられないので、この位の時間に出掛けたようです。

そして4時半頃、突然警察の方から連絡がありました。最初はコンビニで猫のエサでも万引きしたのかと思いましたが、交通事故で病院の方に搬送されたので急いで病院の方に来てください。という内容だったのです。

近くに住んでいる別の息子に電話をし、すぐに車で病院へ向かったのですが、病院に着いたときには既に亡くなっていました。

17年間、病気と闘い頑張ってきたのに、何で、と思いました。事故の相手の方は1回だけしか来ません。それも頭を下げるだけで口に出しての謝罪は一切ありま

せんでした。

悔しくて悔しくて相手方に電話をしても線香の1本もあげに来ませんでした。本当に悔しいです。

事故で息子を亡くした親の気持ち。

この気持ちは一生忘れることはありません。



子供を帰して！！20才で天国へ召された娘へ

岩本 すえ 58歳

私はその日、仕事をしていた。

「〇〇さん電話です。」「だれから。」と聞くと「ご主人から。」

嫌な予感がした。夫は、よっぽどのことがないと仕事場に電話をしない人ですし、電話に出ると仕事場の外に居ると言い、更に不安が押し寄せた。

すぐ着替えて車に乗り込んだ。「しっかりしろよ。」と夫。

「これは、子供に、何かあったな。」と、それも、病気ではなく警察、頭がボーとしてしまいクラクラする思いをした。

事故に遭ったのは、次女だということも推測できた。近くのトラック出入口と言う。その場所は、危険な所だからと娘にもよく言っていたのに、どうして。

警察に着くと、ご遺族の確認をと言われた。夫はすでに、私を迎えにくる前に確認をしてくれた様で、持ち物はいつも次女が愛用している物でした。

その後、近くの葬儀場に安置された。姉兄にもすぐ連絡し、姉は東京より信じられないと泣き崩れ2回失神し、友達に支えながら到着した。兄も、スタッフに車の運転は危険と送っていただき、何でだよと泣き崩れていた。

大型トラックに、巻き込まれ即死と言う。私は母親なのに、顔をすぐには見られなかった。ごめんね、最後は、お父さん、お母さん、痛いよ、と叫んでいたんでしようね。昔から、恐がり、痛みがかったものネ。

姉の侑子が、かつらを東京にまで買いに行き、顔も綺麗にしてくれて、元の顔にしてくれて、よかったネ。成人になってから、食事はしなくても顔はいつも綺麗にしていたものネ。姉さんが美容師でよかったネ。

通夜、葬儀が4日後に予定され、辛かった。触れようとすると、触ってはいけませんと係の方に言われましたが、触ってしまい、その冷たさは、一生忘れません。

今の私は、神も仏もないなど毎日を生きています。どうか、大型トラックを運転する人は安全確認をしっかり行ってください。また、大型トラックの会社の人は、運転の技術のうまい人を採用して下さい。命を失っては返ってこないということを、肝に銘じてください。

事故から2年、トラック出入口に対し、何の対応もなく、急に曲がってくるし、歩行者専用道路に注意している様子もなく、危険を感じる場所です。



